

平成 28 年度長崎大学がんプロ養成基盤推進プラン住宅・地域医療実習

実習生：佐々木龍

実習先：長崎宝在宅医療クリニック

実習期間：平成 28 年 6 月 2 日(木)～7 月 12 日(火)

実習生感想：

長崎市宝町にある長崎宝在宅医療クリニックで実習をさせていただきました。私自身は消化器内科医として大学病院での一般臨床業務を行っており、不定期なスケジュールで実習を受け入れてくださった先生方へこの場を借りて感謝申し上げます。消化器内科での診療上、日常診療で悪性腫瘍・終末期の方と接する機会も多く、実際に在宅への紹介・調整を行う立場として非常に興味がある中での実習でした。

長崎宝在宅医療クリニックはクリニックとしての外来診療は行っておらず往診を専門にされています。院長の松尾先生含め 3 名の先生で実際の往診・診療業務を行っていますが常時 130-140 人の患者さんを診られていました。担癌患者さんだけでなく、慢性疾患の方も診療されています。自宅・有料長期滞在型の施設・グループホームなどへの往診であり 1 日約 30 名前後の往診を、状態に応じては 1 日複数回の訪問も行っていました。ターミナルの方も多く 24 時間、365 日の対応を院長先生が主体となって行われていました。朝のカンファレンスで前日に訪問した方の情報共有をした後、実際の診療業務が始まります。実習の日程が不定期であった関係上、個別の症例についてではなく自身の経験との違いを感じたポイントについて報告します。

これまで私が往診に行った地域と地理的条件が大きく異なっていました。長崎という地理的な条件上、急坂地がほとんどですが、同院での往診は徒歩で向かわざるを得ない自宅が多い印象でした。

また在宅診療の場合、患者さん・ご家族との関係性がより近いことは予測していましたが想定していた以上の密接な関係性を築かれていました。印象的であったのは 10 年近くの長期胃瘻患者さんを介護しているご家族の様子、同時に複数の方の介護をしているご自宅の様子、終末期をなかなか受け入れられないご家族とのやり取り、ご自分が亡くなられた後の障害のある子供さんを心配される患者さん、医療の側面よりも生活の点でのサポートが中心となる方等、様々な家のかたち・家族のかたちを尊重した上での診療が行われていました。「尊重する」という一言での表現は適切でないかもしれませんが、患者さん・ご家族は往診医を信頼し往診側もその期待に応えるという診療が実際に存在していました。



朝カンファレンス時の様子



往診先からの風景

実習中には新規の患者紹介、初回訪問も経験させていただくことができました。紹介の連絡があつてからすぐに紹介元の先生と直接会つた上で情報交換を行い、わずか数時間で患者さんの自宅まで往診に行くフットワークの軽さにも驚かされました。実習当初、外来診療をされないということの意味があまり理解できていなかったのですが、往診専門でされているというシステムが無いと成立しないことが多くあり、その上で患者さんが享受できる多くの利点があることも理解できました。当然のことながら、制度に関する知識も豊富であり、保険診療・介護関連の知識が実際の患者家族の社会生活へ大きく関与している状況も見ることができました。他職種とのネットワーク/長崎地域医療とのネットワークが深いことも予測していましたが、「この先生でなければ実現困難な調整」という印象を持った症例も経験しました。



往診先での情報共有



他職種も含めての往診対応

他に重要な点として明確な理想、理念をもって仕事をされていることはすぐに理解できましたが、患者さん・ご家族・施設職員や他職種への24時間365日対応を理想だけではなく現実的な視点でも対応されていることが私にとっては非常に分かりやすく印象に残って

います。実際の診療場面で得る面も多くありましたが、同時に移動中の車内でお話いただいた患者さんのこと、往診医としての考え方や理念、先生自身のこと、先生のご家族のことや計画されている将来的なプロジェクトのお話まで本当に色々なこととお話いただき得るものが沢山ありました。

これからも長崎で臨床業務を行う私にとっては、短い期間ではありましたが貴重な体験となりました。長崎宝在宅医療クリニックの先生方・スタッフの皆様、ありがとうございました。



実習報告会にて